

第 16 回すばる小委員会議事録

日時：10月20日（火）午前11時10分より午後4時（JST）

場所：国立天文台 解析研究棟 2F TV 会議室

出席者：青木和光、有本信雄、市川隆、太田耕司、川端弘治、菅井肇、
田村元秀（13:00～15:30）、浜名崇、松原英雄（午後のみ）、山下卓也、
吉田道利（以上三鷹）

林正彦（ハワイ観測所から所長報告のみ）

欠席者：伊藤洋一、臼田知史、高遠徳尚、本原顕太郎

書記：吉田千枝

1 所長報告

1.1 最先端研究開発支援費については当初予定していた金額より減額される見通しで、引き続き努力はしているが WFMOS 様装置の実現は難しい情勢だ。

1.2 赤外/PI 装置 WS は来年 2 月に開催するよう努力する（注：2/16 または 2/17 が現在のところの候補日）

1.3 カナダのビクトリア大学から TMT のプロトタイプをめざして MOAO を共同開発しようという提案があった。先方は資金を準備しており日本側の持ち出しはない。すばるでのエンジニアリングタイムが必要になるが、共同利用時間には影響しない。互いの利益になるので進めたいという返事を出すつもりだ。（資料 1）

委員長：そういう国際協力は SAC としては積極的にやっていただきたい。

所長：すばるは共同利用開始から 10 年を経て機械に経年劣化は見られるものの、まだまだ大丈夫だ。運用の効率化を図りながらすばるの性能を生かしていきたい。

2 今後のすばるの運用について

2.1 どうやってユーザー層を拡大し、若いユーザーを育成するか？

委員長：これまで 10 年間の個人別採択夜数を無記名で降べきにソートしたグラフを示す。

このグラフが高原状態になる（つまり、すばるを使う若手が増えていく）のがよいと思うが、現状ではあまりユーザーの裾野が広がっていないようだ。どうやって若いユーザーを育てていくか？

<ユーザーの分布について>

- ・裾野が広がっていないというが、各大学のスタッフの数を考えると採択夜数もほぼそれに比例していると思う。
- ・大口ユーザーに後から参入した人がいるかどうか重要だ。
- ・採択夜数だけでなく論文を書いているかどうか指標になる。若い人が雑用に追われて論文を書けない状況にあるのではないか？
- ・院生に観測に行ってもらいたいし、観測したら論文を書いてもらいたい。

<装置開発と観測>

- ・新装置が立ち上がると新しい人材が来ることになるが、装置ができないから人が来ないのだろう。
- ・装置開発に携わっていると観測に行く時間がない。

<院生の指導>

- ・前回話題になったプロポーザルの書き方の出張指導（採択経験が豊富な NAOJ 所属の研究者による）が有効だと思う。大学共同利用機関としての人的資源も各大学が有効に利用できるとうい。
- ・他大学・機関に滞在中は平常業務を免除されるなどのメリットが出張者自身にもないと難しい。
- ・短期滞在でなく 1 年程度の長期滞在のほうがよい。
- ・単なるプロポーザルの書き方の指導ではなく、実質的な共同研究を行うのなら有効だろう。

等各種の意見が出されたが、院生の観測を促進するために院生枠の創設を検討することとした。S10B 期から 1 セメスタ 10 夜程度の院生枠を設けてはどうか、1 月の UM でユーザーの意見を聞いた上で検討する。

委員長：院生には院生枠だけでなく通常枠に応募することも積極的に推奨したい。

2.2 外国人 PI 提案の増加について

委員長：前回この件について議論した際は、特に対策は取らずに様子を見ることに

なっていたが、10/14の光赤外専門委員会でも看過できないという意見が出たので、再度資料を提示して議論したい。

TAC 経験者：初期の TAC では、採択の最終調整の際に少しこの点に配慮した。ボーダーラインのときだけだが。

C：以前は外国人 PI の採択率が低かったが、最近は国内提案と同等になったようだ。

C：これまでの 10 年はすばるの認知度を上げるための期間だったが、もうそれはいいのではないか？

C：日本の税金を使って運用しているので、やはり何らかの制限が必要だろう。

(参考) VLT では研究チームに ESO メンバーを何割か含むこと、という制限がある。

2.3 一般共同利用と戦略枠との比率について

委員長：第 1 回戦略枠公募の際の議論では、戦略枠は共同利用時間の 25% を上限とすることになっていたが、今後複数の戦略枠が同時に走ることが予想されるので、再検討が必要ではないか？

SEEDS に加えて FMOS, HSC の戦略枠が走った場合の望遠鏡時間のシミュレーションが必要であり、次回の SAC までに委員長が表を準備することになった。

UM でユーザーにも提示することとする。

2.4 今後の Gemini との協力関係について

・ Gemini の将来装置計画検討会報告 (青木委員)

基本的な装置計画が多く、日本人の興味とは方向が違うようだ。また Gemini コミュニティの装置に対する希望も錯綜しているようだった。

C：すばる側から自分の使いたい装置を提案するようにとのことだったが。

委員長：今後の Gemini との関係が見えてこない。時間交換だけの関係になるのか？

C：ALMA が稼動すれば他波長の人で光赤外の観測をしたい人が出てくるだろう。

2.5 インテンシブ枠の拡大について

委員長：インテンシブ枠を拡大し、既存の装置についても集中投資型の観測ができればよいと考えたが、戦略枠が複数走ることを考えると望遠鏡時間に余裕がないよう

だ。

3 UM について

委員長：世話人はほぼ決定しているので、世話人で協議して原案を作成し、SAC に提出する。すばるの運用についての議論が中心になるだろう。

4 JWST と SPICA について(松原委員)

JWST は目的が非常に明確な望遠鏡であり、JPL が製作し 2014 年の打ち上げを予定している。日本はこれまで関ってこなかったが、国際的に通用する人材を育てるという観点からも若手スタッフを送り込む道を考える必要がある。

一方 SPICA は日本主導のミッションであり、今後 1 年が大変な時期だ。望遠鏡の納期の遅れにより打ち上げも 2018 年度末になるが、観測時間の使い方等についても検討していかなければならない。装置は日本主導の複数の装置のほかにヨーロッパ、米国、韓国がそれぞれ主導装置を計画しているが、全部実現することは難しいだろう。国内ではマンパワーがとにかく不足しており、今すぐ優秀な人材が必要だ。

SPICA タスクフォース委員長（市川委員）：

研究者が個人的に参加することは可能だが、機関対機関の関係が難しいようだ。

また、光赤外コミュニティの中でも SPICA は初期段階だと誤解している人がいるようだ。計画の最終段階に来ている。

委員長：SPICA とのシナジーの問題は定期的に SAC で取り上げていきたい。

5 その他

委員長：ALMA の初期科学運用開始が 1 年後に迫っている。ALMA との連携についてすばる側からも発信したい。

次回の SAC に ALMA のゲストをお呼びして各分野のサイエンス計画について話してもらうこととした。

6 12 月の委員会の日程変更

12/11（金）の開催とする。

****資料****

- 1 ビクトリア大学からの共同開発提案レター
- 2 共同利用ユーザーの採択夜数分布グラフ
- 3 外国人 P I 提案の採択数の変遷
- 4 JWST と SPICA の現状
